

水道ジャーナリスト 有村源介の

源流 本流 汽水域

NO. 5 日越大学 (VJU)



吉田元夫学長



中島淳 Co-Director



片山浩之准教授

今年の4月23日から28日まで、ハノイの「日越大学」(ベトナム・ジャパン・ユニバーシティ: VJU)を訪れた。我が国が実施している海外支援プロジェクトとして、極めて重要な案件であるにもかかわらず、上下水道界では当事者以外、殆ど知られていない。かく言う本人が、東京大学准教授の片山浩之氏が赴任するという話を聞いて、初めてその存在を知ったという体たらくである。昨年11月に現地で開学式が行われ、二階俊博日越友好議員連盟会長を始め、国会議員10人が出席した。日越大学の概要を紹介すると共に、開発途上国・新興国支援がなぜ必要かを探る。

日本を始めとする先進国が抱える個別と思われる問題も、途上国・新興国の問題も、共通した問題も、もはや1国だけで、あるいは同盟国間だけで解決できるものではない。共同してビジネスの仕組みもからめながら取り組んで、初めて解決の可能性が開けてくる。

「うちの市の水道料金を使ってなんで遅れた国の水道を整備してやらにやなんの。第一、議会がウンと言わない」

事業体から派遣されたJICA専門員が、そのように責められるという話は、よく聞く話である。上司や首長が途上国支援に積極的に取り組む姿勢があったとしても、職場で理解を得られるとは限らない。「お前のせいで俺の仕事が増えた」と面と向かって言われるなら、説明や反論のやりようもあろうが、「あいつのせいで・・・」となると、冷たい空気にさらされるばかりである。派遣専門家への処遇も制度面ではかつてより改善されたものの、「暗黙の処遇」は残ろう。

「途上国支援などは国の仕事だろう」という考えも問題である。国及び国の関係機関は政策を先導できても、上下水道・水環境の現場を指導できるマンパワーは地方公共団体と民間企業にあるからだ。それを民間が補いつつベースを作っている。民間の緩やかな組織

(自主的勉強会の類)でありながら、政府や政府機関に先行・連携して活動を展開している事例もある。日越大学はそうした重層的な活動の象徴であり、大学がそれを支えている。

#### 【設置の経緯】

2010年、管直人総理大臣(当時)がベトナムを訪問した際、日越共同声明においてベトナムで日本の協力による質の高い大学を設立するという検討案(日越大学構想)が盛り込まれた。この構想は、2014年3月、ベトナム国家主席が来日した際の共同声明にも改めて盛り込まれ、これを受けてベトナム政府は、ベトナム国家大学ハノイ校の7番目のメンバー大学として日越大学を設置する事を決定し、2014年7月に設立された。

#### 【基本理念】

実践的人材養成を重視し、ベトナムの新たなセンター・オブ・エクセレンス(最高水準の教育・研究・人材育成拠点)となり、ASEAN諸国や世界にも開かれた大学として、グローバルな課題の解決に向け、国際レベルで活躍できる人材を輩出する。

#### 【大学の特徴】

- 1) 日本の6つの幹事大学がカリキュラムの準備と教員派遣で協力し、国際水準の教育を提供する。修士課程では全教員の約50%が日本人教員で構成される。
- 2) 授業は英語で実施、必須科目として日本語教育を実施。その他、日本文化・ビジネス観衆への理解を高めるカリキュラムを準備している。
- 3) 日本及びベトナムの日本企業におけるインターンシップを組み込んでいる。
- 4) 自主的に働く能力と想像力を備えた人材育成を目指し、問題解決型、参加型学習に重点を置いた教育を実践。

#### 【6つの修士プログラムと幹事大学】

- 環境工学(東京大学・立命館大学) ○公共政策(筑波大学) ○企業管理(横浜国立大学)
  - 地域研究(東京大学) ○ナノテクノロジー(大阪大学) ○社会基盤(東京大学)
- 共通科目:日本語教育(早稲田大学)

#### 【学長と環境工学コース教員】

- 学長:吉田元夫・東京大学名誉教授(元東京大学副学長、前東京大学附属図書館長)
- 中島 淳:コ-ディレクター・オブ・マスターズ・プログラム 環境工学コース
- 片山浩之:JICA専門家・准教授、東京大学大学院准教授
- これまで講義した学識者:大垣眞一郎(水技セ)、春日郁朗(東大)、神子直之(立命館大学)、佐藤圭輔(立命館大学)、吉川直樹(立命館大学)ら